

各森林管理局における国有林材供給調整検討委員会の実施結果

北海道森林管理局	2
東北森林管理局	3
関東森林管理局	4～5
中部森林管理局	6～7
近畿中国森林管理局	8～9
四国森林管理局	10～11
九州森林管理局	12～14
各森林管理局における供給調整の必要性の検討	15

○北海道森林管理局

開催日	概要(主な意見等)	供給調整の必要性の有無
1 回目 R01.6.27	・ トドマツ原木の供給量は、前年対比では増えているが、中・小径木の不足感が残っている。 ・ カラマツは、相変わらず原木不足であり、特に小径木の適材不足はここ2年ほど続いている。 ・ 針葉樹のチップ用原料は、相変わらず品薄・高値の状況が続いている。 ・ 5～6月は、天候が良く素材生産が進み、運材も順調である。 ・ 苫小牧港を中心に、トドマツ・カラマツ原木の本州への移出が増えているので、その動向について注視する必要がある。 ・ バイオマス発電では、原料の20%～35%ぐらいを末木枝条でまかなえるよう集荷に努めているが、効率的な集積・搬出方法について、更なる研究・改善が必要である。	現時点で供給調整の必要なし
2 回目 R01.9.13	・ トドマツの原木在庫は、前年と比較して増えているものの、生産調整により原木在庫を増やす工場があるなど、一部地域で中・小径木の不足感はある。 ・ カラマツの原木在庫は、地域的に差はあるものの、平均的には前年と比較して増えている。しかし、依然として不足感があり、積み増しをしたいと考えている工場は多い。 ・ チップ用原料在庫は、エゾ・トドで3割ぐらい、カラマツで1割ぐらい。前年と比較して少ない状況。 ・ 素材生産、運材ともに、昨年より天候が良く順調に推移している。 ・ 素材生産に携わる担い手の不足感がある。林業大学校には期待しているが、今後の担い手の確保が課題。 ・ 本州へのトドマツ・カラマツ原木の移出が昨年より増えているので、その動向について引き続き注視する必要がある。	現時点で供給調整の必要なし

○東北森林管理局

開催日	概要	供給調整の必要性の有無
1 回目 R01.6.13	国産材の需給等 ① 7月以降は原木の出材量が減少すると予想される。昨年夏以降に原木が不足したことを踏まえて各工場は在庫を多めに抱えているが、それでも新工場（青森県）の稼働もあり秋口の原木不足が予想される。 ② 製材用素材は在庫が安定しており価格も横ばいを維持する見通し。 ③ 合板用材について、スギは安定。カラマツは引き続き引き合い強く高値保合。 ④ 低質材はバイオマス用、製紙用ともに地域差があるが高値推移で引き合いも強い。 他地域への輸送・輸出 ① 西日本の在庫は今のところ十分だが、大型工場の新設もあり東北からの集材も強まるとされる。 ② 北海道からのカラマツ・トドマツ等の供給は回復しているが、道内需要が旺盛なため、十分な量とはなっていない ③ スギ低質材の輸出オファーがあるが、バイオマス向けや製紙用低質材との価格差次第。酒田港から中国向けの原木輸出が始まり、今後も伸びが予想される。	現時点で供給調整の必要なし
2 回目 R01.9.5	国産材の需給等 ① 秋口以降は原木の出材量が減少すると予想されるが、各工場在庫を積み増しているため、昨年ほどの不足にはならないと予想される。 ② 製材用素材はスギの在庫に余裕があり、価格は横ばいから弱含みで推移すると予想される。 ③ 合板用材について、スギはやや余り気味も価格は横ばいで推移。カラマツは引き続き引き合い強く高値保合。 ④ 低質材はバイオマス用、製紙用ともに地域差があるが慢性的に不足状態で、高値推移で引き合いも強い。 他地域への輸送・輸出 ① 北海道からのカラマツ・トドマツ等の供給は回復しているが、道内需要が旺盛なため、十分な量とはなっていない。 ② 中国向けの原木価格は弱含んでいるが、まだ中国向けに原木を集めようとする動きも見られる。	現時点で供給調整の必要なし

○関東森林管理局

開催日	概要	供給調整の必要性の有無
1 回目 R01.6.12	- 静岡県では、素材の入出荷とも高水準を維持しており、スギ中目A材の需要が強く、適寸材の不足により保合となっている。B材は各地で出材増加にあり、価格下落や入荷制限が見られる。 - 栃木県では、材種によっては大型製材工場で手持ちがあるため、だぶつき気味の材種では価格下落し始めている。今後の入荷量について、梅雨時期及び下刈り時期に入ることから平年並になると予想される。 - 福島県では、素材生産が順調に進み市場に材が多く出回っており、製材品市況が軟化気味であるため、丸太価格にも下押し圧力がかかっている。スギ3m柱取り材の価格が下降傾向にあったが、6月に入り下げ止まり感が見られる。長期的には保合から弱含みと予想される。 - 茨城県では、原木の入荷は順調で材の選別が追いつかない状況であるが、6月以降は、素材生産者が国有林の請負作業に入るため、入荷量は落ち着くと予想される。 - 群馬県では、県内の工場が丸太の在庫を多く抱えていることから、丸太価格が値下げ傾向にある。特にヒノキ材の入荷が増加しているが、中目材以上の原木を製材する工場が少ないため、柱、土台用以外の在庫が増え始めている。 - 丸太の流通形態として、市場ではなく製材工場への直送が増加したことに伴い、大径木等の売りづらい材が市場に溢れ出しており、価格に影響を及ぼす要因の一つになっていると考えられる。新しく大径木のマーケットを作り出すことができれば動き出すのではないかな。 - 尺上材は中目材より高いというイメージであったが、現在は逆転している。母屋取り材が一番高く、柱取り材、中目材、尺上材という順に安くなっており、林家としては納得できない状況である。大径の並材については、大径材まで挽ける機械設備を整えることで、中目材と同じ価格にはできると考えている。	現時点で供給調整の必要なし

2 回目 R01.9.19	- 福島県では、8月に入りスギ3m柱取り材及び中目材が急伸し、品薄状態からの一時的な価格上昇が見られるが、長期的には保合となる見込みである。今後の入荷については、秋雨の影響が心配されるが、例年通り推移すると思われる。 - 栃木県では、スギ小径材・柱取り材は価格を戻しつつあるが、スギ中目材・ヒノキ柱取り材・土台材・中目材は低迷状態にある。ヒノキ中目材は、例年になく低価格状態となっており、14,000円／m³ 台の価格で取引されている。今後の見通しは、長雨の影響もあり虫害材が多く価格は低迷状態にあるが、9月に入り新材が出始めていることから、例年よりは多少遅れるものの、上昇に転じると考えられる。 - 群馬県では、現在入荷している材は、虫害が多く価格が低下している。今後、新材の入荷増加に伴い販売量も増え、価格も上昇してくると思っている。 - 茨城県では、スギ3m柱取り材は引き合いも強く、13,000円／m³ 台に回復してきたが、一方でヒノキ材は弱含んでいる。素材の入荷状況については、民有林材は減少しているが、国有林材の入荷は順調であり、元落ちも少なくなっており荷動きも良い状況である。 - 静岡県では、天候の影響もあり、入出荷とも順調である。売れ行き好調の並材を中心に堅調な値動きとなっている。 - 関東では、ヒノキ柱材に対する需要が減少し、土台程度しか用途がなくなっているのが現状である。スギ・ヒノキとも用途が似通ってきているため、価格差がなくなりつつある。 - スギ丸太の中国向け輸出とフェンス材等の米国向け輸出は、関税25%への増税前の駆け込み輸出等により混乱していたが、現在は落ち着きを取り戻しつつある。 - 柱・梁・桁は大部分が集成材にとって代わられたが、今後は、残る土台・母屋・大引・根太・間柱も集成材や LVL に押されるのではないかと見られる。	現時点で供給調整の必要なし
--------------------------	--	----------------------

○中部森林管理局

開催日	概要	供給調整の必要性の有無
1 回目 R01.6.7	- 岐阜南部ブロックでは、昨年の 11～4 月まで価格の上昇が連続しているが、特に共販で引き合いがかなり強いことが理由である。また、ヒノキの 3m が連続下落となっているが、1～3 月まで例年になく好天に恵まれ、数量があるためにだぶつき感が出たことが原因と考えている。岐阜北部ブロックの在庫量について、7～9 月の災害被害木の処理や北陸の CD 材工場の不具合で、チップが原木も含めて岐阜に流入してきた。さらに岐阜南部ブロックの在庫量について、4 月の在庫量が増えているが、今年は月末に 10 連休があって輸送関係がなかなか動かなかったことでバランスが崩れた。価格については、それほど下落が続いたという印象はない。 - 今年の 3 月に極端に原木価格が高かったのは B 材工場。A 材工場については順調に製品が製造されており、引き続き強い要望がある。不足感があるのは B 材工場。 - 去年から今年にかけては好天に恵まれ、国の生産請負では安定した供給量があった。一方で需要は 4 月の後半に連休前の駆け込みで不足感があった。連休後にビルダーが弱くなってきている。消費の源がパワービルダーやローコスト系に流れていっており、並材でないとなかなか動かない。全体的な需給でみると、供給は安定しているし、利益の上がるような A 材販売は難しいが、B 材のほうが取り扱いやすい状況で推移しているのではないかと。 - 岐阜県の 16 市場のうち針葉樹を主に扱うのは 13 市場。4～6 月は 13 市場の取り扱い量は前年度に比べて 5% 伸びている。価格についても伸びており、対前年度比 14% で全体的に上がっている。 - 本来は A～D 材の調整がうまくできれば適正な価格になっていくのではないかと。 - 愛知でも 4 ヶ月連続で下落しているが、9 月の台風の影響により材の受け入れがなかったが、10 ～ 11 月になって急激に伸びている。これは東三河の市場で毎年開催している「三河材まつり」のため 10 月の半ばから材を集めたことに起因する。10 月は作業路の復旧などに注力し、中旬以降は材が出てきた。まつりの効果もあって値段が上がった。3～4 ヶ月価格が下落しており、11 ～ 12 月がピークで下がってきているが、これが最近の標準的な価格と思っている。ただ、5 月に入ってもあまり 4 月と変わらないような値だったということで先行きは心配している。	現時点で供給調整の必要なし

2 回目 R01.8.22	・ 愛知ブロックのスギ4mが逸脱の範囲にあるが、この長さでこの太さだったら3mにするといった固定観念を持っている業者が多く、川上・川下側で意識の違いがある。 ・ 岐阜県はヒノキの値段が今年は低調に動いている。中国・近畿エリアで出材が好調な影響を受けて、岐阜にも流れ込んでいる。ヒノキ3mの値段が若干動いたが、需要に対して不足している感がある。 ・ 東濃地域のヒノキの供給については、特に大きな出来事がある訳ではない。夏場はどうしても出材は減るし、建築は好調なので無い高の傾向。スギの3m、もしくは5、6mが少ない。製品とのバランスがもう少し良くなればよい。 ・ 買い手側としてはスギは潤沢にあり、大径材が入ってきている。今は入荷量が少ない時期だが、在庫を豊富に持っている。 ・ 木曽は例外的なところがあるかもしれないが、山からの供給は4～6月は少なく、7月の長雨で出材量が急激に減った。また特殊な集材なので山に材が残ってしまい、挽くのに見合った品質ではなくなってしまった。 ・ カラマツ集成用ラミナが非常に不足しているのではない。出材が少ない割には価格は上がらない状況。 ・ チップ工場で要因の異なるいくつかのトラブルがあり、関連業者も含めて製品在庫が増えた。半年は今の状況が続くと思う。 ・ 裾物がチップやバイオマスで使えるようになって足を引っ張り、全体の価格が下がっているのではない。用材を主体として伐れば価格は上がらないか。 ・ 製材業者が減っている。売り手は言い値で買われてしまう。競合相手がいないのが単価を下げている原因ではないか。 ・ 長野県では市況調査をして木材単価を公表しているが、7月時点の単価で初めてヒノキとカラマツ(中目材)が逆転。集成材工場への出荷が多い。オリンピック景気。 ・ カラマツの価格上がっているのは違う用途を見つけたから。スギはうまく売ろうと施策を打っている。ヒノキは何も手を打っていないことに問題がある。 ・ 中部局だけではなく近畿中国や関東エリアの影響も受ける。局外の情報をいただくのも判断材料として活用の仕方があるのではないか。	現時点で供給調整の必要なし
--------------------------	--	----------------------

○近畿中国森林管理局

開催日	概要	供給調整の必要性の有無
1 回目 R01.6.13	- 和歌山県内のプレカット工場では、柱取り丸太の在庫が徐々に減少し、原木市場でも柱取り丸太が少ない状況にある。 - 京都府内で来年4月に稼働予定の木質バイオマス発電所では、未利用材の集材を開始した。 - 奈良県内の原木市場では、天候が安定していたことから例年より出材量は増加し、製材用・ラミナ用・合板用の全てにおいて飽和感が出ている。6月以降は、梅雨や長雨と伐り旬が悪くなるため、9月まで出材量は低位安定すると見られる。並材の価格は、スギ・ヒノキともに弱含みで推移し、6月以降も値下げ基調が予想される。下級材は、バイオマス需要で安定している。 - 岡山県から韓国・中国向けの木材製品の輸出が堅調に推移している。 - 岡山県では、県独自のおかやま森づくり県民税を活用して、認証された森林から出材される木材を対象とした住宅助成制度を新たに加えて、住宅への支援策を強化している。 - 和歌山県では、外構部の木質化対策支援事業について、工務店からの引き合いが多くなっている。 - 和歌山県では、伐採現場において、安全を見て4m材に造材することが多いことから3m材が減少傾向にある。 6月以降は、製材・合板用材の伐採は控えて、昨年受けた災害の復旧作業や、これからの台風シーズンに備えた屋敷林の処理作業等に人員が回るため、チップの出材比率が高まると見られる。 - 大手ビルダー等は3月までの受注を相当積み上げており、受注残を抱えている。施工能力自体は増やせないなので、急激な増減はない状況が続くと見られる。 - WウッドやRウッドの欧州材の値下げ基調により、8月(7月の現地積み)から年末にかけて、国産材に対する値下げの影響が懸念される。	現時点で供給調整の必要なし
2 回目 R01.9.30	- 京都府内の合板工場では、米材を減らし、国産材(ヒノキ・カラマツ)を増やしたことにより、7～8月の入荷量が 20%増加となった。また、10～12 月におけるスギ原木の買取価格に値下げの動きがある。 - 奈良県内の原木市場では、秋以降の出材準備段階となり、出材量は減少傾向。本格的な出材は9月下旬から始まると見込まれている。並材は冬期に出材が安定していたため、製材・ラミナ・合板用材の全てが飽和状態となり、スギ・ヒノキ	現時点で供給調整の必要なし

	の価格は4～5月以降から下落して、6月以降は出材量の減少から底を打ったが安値安定状況が続いている。これから台風シーズンを迎え、出材作業の進捗に不安があるが、スギは安値安定、ヒノキは若干の値戻しが予想されている。下級材はバイオマス需要から安定している。 - 和歌山県内で 2020～21 年に稼働を予定している2箇所の木質バイオマス発電所では、本年1月に1箇所目が、5月から2箇所目が燃料用材の集荷を開始した。 - 広島県内の原木市場では、長雨の影響について注視する必要があるが、現在のところ、大きな変化はない。スギの相場は横ばい状況で、引き合いは強くない。ヒノキの相場は引き合いが強くなっていて、強含みに推移しているが、大きな動きではない。 - 広島県内の製材工場では、8月は操業日数も少なかったことや、猛暑の日が続き、無理な工場操業を避けたため、製材量が減少した。9月も操業状態は大きく変わらない見込みとなっている。 - 国内木材マーケットは消費増税絡みの需要にも一服感が出てきた。円高の進行もあり、輸入材の先安感が広がっている。各プレカット工場は当用買いを実施し、在庫量の圧縮を進めており、結果的に需給が緩み、相場も一層弱くなってきている。 - 木材価格の動向において、欧州材の今後の安値入荷が現実的な不安材料となっており、相場が下落の度合いを強めている。 - 今後、多くの木質バイオマス発電所が稼働を予定しているが、地域にCD材の供給に対し十分な余力があるのか、山元への利潤還元が行われるのか疑問を感じている。また、バイオマス用材に牽引され、山元における原木の仕分け作業を疎かにしたり、水分率を下げるために原木市場の土場を長期間占拠することがないように官民あげて努力すべきタイミングと考える。 - 岡山県では、岡山県森林認証・認証材普及促進協議会として、「(一社)緑の循環認証会議(SGEC)」のFM認証を取得しており、本年度認証面積を 89,321ha に拡大した。また、東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会選手村ビレッジプラザへの木材提供については、8月で製材品(82.6 m³)、CLT(20.2 m³)の提供が完了した。	
--	--	--

○四国森林管理局

開催日	概要	供給調整の必要性の有無
1 回目 R01.6.26	- 高知県における平成 30 年度素材生産量は 646 千m^3となり、平成 29 年度との比較で 97%となった。これは7月豪雨や相次いで発生した台風の被害が影響しているのではないかと考える。 - 平成 30 年度の高知県森林組合連合会の共販所全体における原木取り扱い量については 392 千m^3で、対前年度比 109%となった。 - 市町村内での原木取り扱い量を増やすために、市町村内のストックヤード等に出材した場合に、運賃補助を行っている自治体がある。 - 平成 30 年度の高知県素材生産業協同組合連合会会員における素材生産量は聞き取り調査によると約 344 千m^3となっており、前年度より約 28 千m^3の増産となった。 - 川上から川下までの状況をデータベース化して、運送業者も含めてマッチングができると効率的な運用ができ出材量も増加するのではないかと考える。 - 製品の取引動向を見ると役物が売れない状況が続いている。 - プレカット工場は好調な状況であり、ローコスト住宅への供給が増えている。 - 高知県内における製品の消費量は少ない状況であり、地産外商のみではなく地産地消の取り組みについても考える必要があるのではないかと考える。	現時点で供給調整の必要なし

2 回目 R01.9.24	- 高知県森林組合連合会では、皆伐後の植付けに対して1ha当たり 20 万円の助成を行っている。(予算:1,000 万円) - 素材生産業者の増加は見込み難い現状にあり、限られた素材生産業者の中で素材の増産を図るためには、生産性の向上が必要不可欠である。 - スギ材の原木価格が下がってきており、売りづらい状況となってきた。このような状況を変えるためには、四国内でのスギの需要を増やし、原木価格を上げる必要がある。(価格が安いためスギ素材を県外に運搬しての販売ができない) - 徳島県内で県産スギ製品を取り扱う業者が少なく、工務店等は他県から仕入れている場合が多い。 - 素材の安定販売に向けては、原木市場による個別の取組ではなく、連携・協力・組織化しての取組が必要である。 - 製品はヒノキ4m土台を含め、ヒノキ構造材の売れ行きはよい状況である。 - 天候不良により素材の出材が少なく原木価格は上がってきている。また、雨の影響等で材質が悪い。 - 製材業においても人員が不足しており、安定生産に向けては生産性を向上させる必要がある。 9月に入りプレカット工場の稼働状況は悪くなっているように思われる。 - 徳島県での外材入荷が激減している。	現時点で供給調整の必要なし
--------------------------	--	----------------------

○九州森林管理局

開催日	概要	供給調整の必要性の有無
1 回目 R01.6.25	- 合板の原木入荷は順調に推移し、原木在庫量も約3ヶ月分を確保しており、合板工場もフル稼働で原木を消費している。現在、必要最小限度の外材消費率で原木を消費しており、今年の秋頃にはオール国産材を目指している。製品の動向は、住宅着工戸数も毎月上下しているが、年間を通せば昨年比ほぼ横這いで推移している。時期的に一服感がある。 10月の消費増税に関しては若干の影響はあると思うが、合板の動きも徐々に加速していくものと思われる。 - 日本の紙の市況は、印刷用紙等の需要が対前年度比5%ぐらいずつ減少している状況である。また、米中の関税問題で、中国のマーケットが冷え込んでいる。中国向けの古紙の輸出が減小していることから古紙の単価が落ちている。また、中国政府が「もう日本から古紙を輸入して紙を作るような事は止めたい」との方針を示しており、国内の古紙価格は暴落と言える厳しい状況である。 - 原木の出材、流通は非常に活況というか元気がいいと感じている。製品に関しては消費増税により過去の体験から動きが良くなる期待感もあったが、前回に比べれば駆け込みもなければ反動も和らいだものとなると思われる。秋口の動きに期待したい。 - 製品の輸出に関しては、原木も製品も輸出したものが加工されてまた日本に戻ってくるブーメラン輸出なども有り、統計の取り方をそろそろ考えるべき時期に来ていると感じている。 - 製品の動きは少し落ち込んでるように思われる。工務店等でもクレームとかを考え G 材(グリーン材)から AD 材や KD 材に移行しているのが多いのでは。G 材は一部値崩れしてるが KD 材の価格は値崩れも全くない状況である。原木価格は6月に入り値戻ししている感じ。 - 宮崎では直納での入荷が増えており、市場での単価が本当の単価なのかと考える時期に来ている。 - 国産材需要は増えており、九州各地の大型工場が稼働率を上げてる状況。安定供給システムも価格が安定し販売、供給ができています。しかしながら、まだ川上と川下の情報共有が不十分なところもある為、市場ニーズによる有利採材等を含めた情報共有が必要である。	現時点で供給調整の必要なし

	- 九州全域で請負事業体の不足に加えトラック、運転者不足も深刻で山に丸太はあるがトラックが回らない状況。山に材はあるがトラックが取りに来れず安定供給に支障が出ているというような話もあり自社ストックヤードにはかなりの量が集まっている。納材しやすい環境を作ることが必要。 - 今後は森林経営管理法の施行もあり「木を伐る」事に対して様々な注意を払う必要がある。「伐採」から「樹木採取」へと表現が変わってきており森林環境譲与税も今年年から前倒しで使われる事などからこれまで以上に世間の目が厳しくなっている。 - 素材生産業者は増加傾向にあるがどれだけの数が諸問題に対応し生き残れるかが課題。 - 市場での取扱量が今年度はこれまでで最高になるのではないかと状況である。 - 価格が暴落したときに数量が大きく落ち込んだ経験もあるので、大きな需要先が増えてくるのはありがたい話。 - 買い方の動向は大型工場の買い気が強く応札も多いが地元中小工場は手持ちが多いようで虫害も考えて応札している印象。輸出用材は中国向けが弱含みだが量は変わらず商社が買っていく。台湾・韓国向けは価格も量も変わらない。	
2 回目 R01.9.17	- 合板の市況は堅調。全国的に合板不足が5年も続いてきたが、4月頃から少し落ち着き感が出てきたと思っている。総着工戸数が昨年より低く推移する中で、九州の木造着工戸数についてはむしろプラスで推移しており、合板の不足感があつたが、新しい工場が出来た安心感からか仮需が無くなったという感じがしており、一部で生産調整をしている。また、輸入合板の在庫が減っている状況を国産材合板がしっかりカバーしており、今後更に国産合板比率が大きくなってくると思っている。 - 製紙業界は昨年、新聞紙や印刷用紙の減などにより非常に厳しい状態であったが、現在、各種対策を立て順調に推移している状況にある。 輸出用丸太については為替と中国の動向により八代方面も港着で8千5百円(／m3、以下同じ)で買っていたものが、7千円半ば、これ以上円高が進むと6千円代に突入するとの話もある。量についても、6月頃までは順調に行っていたが、今後の動向次第では半分位になるのではと言う話もある。 - 持ち家の着工戸数の数字を見ると決して悪くないが、問題は貸家のほうで、ここ何年か先食いしてしまったのかなという気がしている。持ち家の分と貸家の分が相殺されて何となく消費税の動きとしてあまり感じられないのかなという気もしている。	現時点で供給調整の必要なし

	大手住宅メーカーの受注は堅調であるが、中小の工務店の受注は全体的にみると差が出ているという気がしている。 • A材B材は高値で推移しているが、C材が宮崎県でも9千円から、7千円くらいまで下がってきた。今まで一番価格が安定していたC材が暴落している。今までC材が9千円で下支えになり、B材がそれ以下になることは無かったが、万が一今後製品の利益が減って出材増があればC材が8千円台、直材が1万円そこそこの風になって、木材業界全体が疲弊していくようなことになっていくんじゃないかと危惧している。 乾燥機を持たない中小製材所が倒産するとか廃業するとか聞こえ始めている。 • B材C材の需要拡大により、簡易な山土場選別で工場直送が可能になり、市場の取り扱い量が大幅に減少している。市場も素材生産や森林整備への取組の外、川上～川下のコーディネーター的な役割を担う等大きく変化していかなくてはならないという岐路立たされている。 大径材の中国向け輸出は一つの大きな販売チャンネルだったが、これが止り大径木の販売に苦勞し始めている。小径材についても輸出向けが行き場を失い、一気にバイオマス用として増えてきている。 • 環境への配慮にしても労働安全の確保や労働条件にしてもそれをクリアして木材を安定的に供給するという、当たり前のことのハードルが従来とは違った形で年を追う毎にどんどん高くなって来ていると感じる。 例えば森林環境税により森林整備をしようとする「重機(フォワーダ)集材は環境税を使って環境を破壊しているじゃないか。」などと言われかねない。一般の人から見ると、我々が当たり前と思っていることが当たり前じゃないと思うかも知れない。 • 傘下森林組合の素材生産量が5年前の倍近くと、大き伸びている。また、5年前は主伐材より間伐材が多かったが、平成30年度は全体の75%が主伐材、残りの25%が間伐材となっている。 木材生産量は増えているが市場の取り扱い量は増えていない。 輸出向けは5月頃に比べると非常に買い気が無くなり、現在は価格が当初より2千円程度下がり、バイオマス用の価格に近い価格になってしまっている。	
--	--	--

各局森林管理局における供給調整の必要性の検討

局	第 1 回	第 2 回
北海道	供給調整の必要なし(R01.6.27)	供給調整の必要なし(R01.9.13)
東北	供給調整の必要なし(R01.6.13)	供給調整の必要なし(R01.9.5)
関東	供給調整の必要なし(R01.6.12)	供給調整の必要なし(R01.9.19)
中部	供給調整の必要なし(R01.6.7)	供給調整の必要なし(R01.8.22)
近畿中国	供給調整の必要なし(R01.6.13)	供給調整の必要なし(R01.9.30)
四国	供給調整の必要なし(R01.6.26)	供給調整の必要なし(R01.9.24)
九州	供給調整の必要なし(R01.6.25)	供給調整の必要なし(R01.9.17)